

2018年10月18日

新宿区立戸塚第三小学校「いのち」の授業

～瀬尾征男元東京海上取締役・神戸支店長が伝えたかったこと～

編集；児島 正

損保ジャパン日本興亜 OB

損保阪神の語り部

損保 OB・OG の防災を考える会有志の会

※ 添付資料：瀬尾さんのお友達戸塚第三小こどもたち 180 人の手紙から

（授業概要）

1. 日時：10月18日（木）午前10時40分から11時40分（3時限目）
2. 場所：体育館
3. 生徒：1年生から6年生全校180名
4. オブザーバー：約30名弱（戸塚第三小学校学区エリアの方々、早大防災教育支援会、東京海上日動・損保ジャパン日本興亜・損保協会の現役及びOG・OBなど）
5. 企画趣旨：東京大空襲、阪神・淡路大震災、そしてガンの闘病体験を通じて身を持って学んだ「生きる力」と「人のいのちの尊さ」を未来を創るこどもたちに語り継ぐ。

（いのちの授業）

服部校長先生挨拶

これから瀬尾さんがお話されます。瀬尾さんは、阪神・淡路大震災という大きな地震が大阪・神戸で起きたときの元東京海上取締役神戸支店長でした。支店長というのは、神戸支店で一番えらい人です。

「その時、地震の後始末で大変だったのですが、みんながこんな風に頑張っていたよ」と地震の時の経験の話をされるでしょう。

また、これまで数々の経験をされて生きて来られました。毎日をどう過ごせばいいのか少し教えてくれるかも知れません。はっきりと言われたいかも知れません。瀬尾さんの話をよく聞いて、一人ひとりがどうすればいいか考えて下さい。

それでは瀬尾さんよろしくお願ひします。

瀬尾さま

おはようございます。瀬尾征男と申します。78歳です。のどのガンにかかっているので、よくしゃべれません。しばらく我慢して聞いて下さい。

皆さんは1年生から6年生までで、歳の差も大きく理解力も異なると思われませんが、

今日は、皆さんを「おとな」だと思って話をします。

半分聞いても、半分聞かなくてもいいです。全部正しいことを言うわけでもありません。みんなが考えて、必要だなと思ったこととか、面白いなと思ったことだけを覚えておいてくれればいいなと思います。各々自分の考えで聞いてくれればいいです。

私が78年生きてきたことぜんぶをお話すると長いので、3つに絞って①疎開したときのこと②阪神・淡路大震災のときのこと③病気になったことについてお話しします。

1. 疎開体験

- 私が生まれたのは1940年。その翌年の1941年12月8日に第2次世界大戦が起きました。戦争が終わったのが1945年の8月15日でした。
- 戦時中、私は小さかった（4才、5才）のですが、敵の連合軍（アメリカ軍）の飛行機が飛んで来て、爆弾（焼夷弾）を落とすと火災になったのをよく覚えていています。
- 戦争がますます激しくなると、危険から逃れるために両親と住んでいた東京を離れ、おばさん（父親のお姉さん）が住む田舎（茨城県の筑波山のふもと）に移り住みました。これを疎開（そかい）といいます。
- 戦争中で汽車にも乗れませんでしたので、疎開先のおばさんの家までの80km～90kmぐらいの長い道のりを父親の自転車に乗せてもらったり、歩いたりして行きました。とても大変でした。
- 疎開中、昼の間おとなたちは田んぼなどに働きに行ってしまうので、独りぼっちでした。近所の子どもたちと遊ぶほかないのですが、坊主頭で裸足のまま飛び回る近所の子たちの中に入ると、髪の毛が長い「坊ちゃん刈り」の自分は非常に目立ってしまい、何かといじめられました。
- いじめられても親はいないし、助けてくれる人は誰もいない。泣いて、いつかやり返してやろうと思う毎日でしたが、1年ぐらい経つと、竹馬とか木登りもできるようになり、いじめられっぱなしではなくなりました。
- 皆さんもいじめられたりいじめたりすることがあるかもしれませんし、大人の社会でもいじめがあるかもしれません。でも、それは考え方で、いじめる人もいじめようと思っていじているのではないと思います。
- 自分は何となくいじめられていると思っていても親や先生にも言えない。悲しくて最後は苦しくなって自分で死んじゃう人もいますが、それほどばかばかしいことはありません。人をいじめるのはもちろんいけないことですが、いじめられたらなぜいじめられるのかを考えて、いじめられないようにする。自分を鍛えることも必要かもしれません。
- 関東平野にある筑波山のふもとから、焼夷弾で真っ赤に燃え上がる東京が見渡せました。両親が死んでしまったのなら自分も死のうと、食べ合わせが悪くて死んでしまうと言われていた氷と天ぷらを食べたいとおばさんに頼んだこと

もありました。その時に死ななくて良かったと今は思うし、疎開体験が震災の時に役にたったとも思います。

- こどもの時から、毎日のように焼夷弾が近くに落ち、死ぬ人を見ていたので、死について考えてきました。自分で死ぬということは、目の前が真っ暗になりこれからの自分の人生がなくなることで大変なことです。
- きみたちが生まれて、自分の人生があるのは、両親のおかげです。人間のこどもは最初に両親に感謝しなければなりません。これから何になるか、どのように育つか、きみたちが世の中を良くするのは、生まれたことに感謝しなければなりません。

2. 震災体験

- 会社生活の最後の年 1995 年の 1 月 17 日に大きな地震が発生しました。私の住む家は支店長の家ということで鉄筋コンクリートのマンションでしたので無事でしたが、木造の古い賃貸アパートに住んでいた神戸大学の学生さんたちの多くが、潰れた家の下敷きになって死んでしまいました。
- 地震に強い家に住んでいたおかげで、生き延びました。生き延びたからには、どうすれば困っている人を助けられるか考えました。
- 都市型災害でしたので、道路が陥没したりビルが倒れたり、火災が発生するなど神戸の街は大混乱になりました。ただ、まだ使える建物とか、商品を買っている店舗もあり、着るものも食べるものも住むところも何とかありました。
- 戦争のときは、すべてが焼け野原になって、親もなくして、食べ物も、着るものも、住むところもありませんでした。戦争の時に比べれば震災の方がまだいいなと思いました。
- 着るもの、食べるもの、住むところがあるということは幸せです。みんなも常日頃から幸せであると感じてほしい。
- 神戸から大阪に行こうにも電車はストップ。生き埋めになっている人もいる。電話もつながらず、知っている人も近くにいないとなると、何をしたら良いのか分からず、あちこちで起こっている火災現場に火を消しに行くこともできませんでした。人を助けようと思っても、人間一人では何もできないということが良く分かりました。
- 地震は 17 日の朝に起きました。私は、20 日に支店に社員を集めて「自分の命は自分で守ってくれ」と。それから、「仕事の責任は全部私が持つ。家族を助けたら、となり近所の人、次に知っている人を助けよう。会社の仕事は一番後で良いから自分の常日頃のようにやってくれ」と言いました。
- 信頼し、任せた結果、社員は皆りっぱに仕事をしてくれました。生きるために何を大切にすればよいかを考えて行動すること、自分で考え、自分で行動し、自分で責任を持つことは非常に重要なことなのです。

3. 重い病気

- 2年前に下咽頭がん（のどにできるがん）にかかりました。これを完全に直すには声帯をとらなければなりません、私は声を失う手術ではなく、抗がん剤と放射線を当てる治療を選びました。
- 2カ月間入院しましたが、放射線を当てるために歯は全部抜かれてしまい、口内炎になって口からものが食べられない時期が続きました。何も食べられないときに、ベッドの上でいろいろ考えました。「このまま死ぬのかな」と。
- それから、小学校時代や学生時代、会社員だったころのことも色々思い出して考えていると、病気とか震災とかは大変だけれど、それもまたいい経験だったなと思えるようになりました。
- 皆さんも、これから不幸なこともあるかもしれませんが、不幸だとは決して思っははいけません。何でも試して、辛いことにも耐えてみましょう。他の人がやっていないものを経験するということは必要なことなのだと、大病をして考えられるようになったことはプラスでした。
- NHKで「ダーウィンが来た」というのをやっていますが、動物が生まれてくるころや、子育てに苦労するころ、喧嘩をするシーンなどがよく出てきます。人間も同じ動物ですから、あれは皆さんが生きるすべを勉強する良い番組だと思います。
- ただし、人間は人を殺してはいけなしいし、自分も含めて人です。自分を殺す自殺なんて最悪で、絶対やってはいけません。それから人の心や体を傷つけてはいけません。こう言ったら人がどのように傷つくかをよく考えましょう。
- 勉強というのは出来た方がいいけれども、できなくてもあまり関係ないなど80歳ぐらいになった今はそう思えます。ただ、人間が他の動物と違うところは、考える力をもっているということ。どうやって生きるか、逃げるかを考えるという習慣を身につけるために勉強してください。
- 病気にかかり大変でしたが、娘と息子二人、それと孫が心配して毎週1回ぐらい家に来てくれます。家族が皆で集まると、お互いが仲良くなる。これは非常にいいことで、物事には必ずいいことと悪いことがあるのだなと思いました。
- 2003年に会社を辞める時に悪性胃癌になり6カ月で死ぬと言われ、胃を摘出しました。下咽頭癌もない。肺に転移したがんは放射線治療で今のところは消えています。ただここからの転移なので、いつ死ぬかわからない。お医者さんから、ステージ4で余命1か月か2か月、3か月か6か月かわからないと言われていました。1年たった今皆さんの前でこうやって話ができるから私は幸せです。

4. 最後に

- 自分の命は自分で守ること。国が助けてくれる、学校が助けてくれる、先生

が助けてくれる、親が助けてくれるなんて思っははいけません。危なかったら、自分で逃げなきゃだめです。

- 自分のやったことは自分が責任を負うこと。人のせいにはしない。人間は一人では生きられない。
- もし今災害が起きたらどうやって逃げるか。先生よりも、親よりも隣の人が一番大事です。どうやって逃げるか相談することが重要なのです。普段から人と仲良くすることが大切です。よく考えて生きて下さい。
- 考えるときに重要なのは、コインに裏表があるように、いいことの裏には悪いことが、悪いことの裏にはいいことがかならずあります。また、できるだけ明るく広く前向きに考えることが重要です。

5. こどもたちと瀬尾さまが友達になったふれあいタイム

瀬尾さん：みなさんから質問を受けたいと思います。

岡安副校長先生：瀬尾さんが、茨城への疎開と阪神大震災の時のこととご自分の病気の話をされました。折角の機会です。手を挙げて質問して下さい。

生徒：阪神を応援していますか？

瀬尾さん：東京生まれで、野球は巨人を応援している。巨人の敵は阪神で、お互いがいいライバルだ。阪神はきらいではない。巨人の次に阪神が好きだ。

瀬尾さん：今日はみんなとお友達になれてうれしいよ。なんでも聞いて下さい。

生徒：東日本大震災のとき、現場にいましたか？

瀬尾さん：

- ◆悪いけどゴルフ場にいた。揺れたので、自分を守ることを第一に考えた。だだっ広い場所なので安全だと思った。
- ◆テレビの津波の恐ろしい映像を最初から最後まで見た。家に帰れなくなり、車をおいて歩いて自宅まで帰った。
- ◆テレビを見ている間、津波からどうすれば助かるか考えていた。
- ◆直下型地震と違って、助かるのは難しい。逃げるしかないと思った。
- ◆逃げるが勝ちという言葉がある。火災でも津波でも、危ない時は逃げるしかない。
- ◆急に先生とか学校とか親から教えてもらおうとしても無理だ。日頃からどうやって逃げるか自分で考えることが大事だ。
- ◆駆けっこも重要だ。真剣に遊んでいないといざというときに逃げられない。勉強でも、遊びでも、音楽や絵でも、自分の好きなことは本気で取り組むことが大事だ。

生徒：巨人の誰が好きですか？

瀬尾さん：

- ◆一番の坂本だね。岡本もいいけど肝心なところではダメなので、物足りないな。坂

本がいい。

生徒：戦争の時、飛行機から爆弾が落ちたときどういう気持ちでしたか？

瀬尾さん：

- ◆今は中野に住んでいる。生まれたのも中野だ。戦争が始まって、1年ぐらい経つと日本上空にB29という飛行機が飛んで来て、爆弾をどんどん落としました。
- ◆落としたのが単なる爆弾であれば一回だけだが、焼夷弾で火をどんどんまき散らすので火災が燃え広がった。
- ◆爆弾を落とすときの目印になるので電球を消した。まず電球にカバーをかけて家中を真っ暗にして、庭の防空壕に逃げ込んでいた。
- ◆防空壕と言っても、庭に穴を掘っているだけなので、今考えると助かるわけがないね。
- ◆両親もこのまま中野に住んでいると危ないと考えて、空襲のない田舎の親戚の家がある茨城に自転車で私を乗せて、親戚の家に預けて疎開させた。
- ◆話は変わるが、戦争が終わってからは、食べるものがなかった。田舎にお米とか野菜を父親と一緒に買い出しに出かけた。
- ◆田舎から東北線の列車に乗って上野駅まで来ると折角買って来た食べ物はお巡りさんさんにヤミ米と言ってすべて没収された。

生徒：なんで取られるの？

瀬尾さん：

- ◆食べるものがなくなって、配給制になった。ヤミ米は見つかるとお巡りさんにみんな取られた。
- ◆だんだんみんな賢くなって、お巡りさんから逃げるようになった。上野駅で普通に降りると、お巡りさんにみんな取り上げられた。駅に着く直前には、列車がゆっくりになるので、父親がまず飛び降り、まねて自分も飛び降りていた。
- ◆今はけがとか血が出ると大変だけど、列車から飛び降りていたので、擦り傷や血が出るのは当たり前だった。
- ◆そんなことをこどものころやっていたので、遊びは誰にも負けなかった。遊びも真剣にやった方がいい。擦り傷するくらい元気に遊んだほうがいい。

生徒：いままで生きて来て一番怖かったことは？

瀬尾さん：

- ◆20代からヨットを始めた。白い帆と青い海・空と言うけど結構大変だ。海で3回ほど死にそうになった。海でおぼれそうになっても誰も助けてくれなかったり、船がぶつかりそうになったりした。
- ◆病気も、胃がん、下咽頭がん、肺がんになった。今度転移すれば、お医者さんから死ぬと言われている。余命も1か月ともいわれた。

- ◆手術もしないことにした。検査も悪いところが見つかるだけなので一切しない。ホスピスという言葉知っているかな。お医者さんから痛みをやわらげる緩和ケアと言われている。
- ◆いろいろあるけれどこれも人生だよ。死ぬことを恐れてはだめだよ。いつ死んでもいいように楽しく今を一生懸命に生きることが大事だよ。
- ◆この年になると生きていだけで素晴らしいことだよ。死ぬということは生きることだよ。君たちは、まだ小さいから違うだろうが。

生徒：癌はどんな感じでつらいのですか。

瀬尾さん；

- ◆がんは、一種のおできのようなもので、悪い細胞がどんどん増える病気。ほかのいい細胞にも悪い影響が出て、いろいろな症状が出てくる。
- ◆下咽頭がんにかかったとき、もう治療するつもりもなかった。お医者さんに治療をしないとどうなるのか聞いた。脳に転移すると認知症だけならまだいいが、家族や奥さんに暴力を振るようになると言われた。奥さんからごはんを食べさせてくれなくなると困るので、抗がん剤と放射線の治療を受けた。
- ◆がんは早くわかれば、心配することはない。手術をするか、抗がん剤を飲むか、放射線治療をすれば、治る。発見が遅くなると副作用とか後遺障害が出てくる。
- ◆年をとれば、人間はみんなガンになると思っていた方がいい。早めに見つけることが大事だ。手術をするか、抗がん剤を飲むか、放射線治療を選ぶか、自分でどの方法を選ぶか決めることが大事だ。
- ◆きみたちは、若い。まだ心配することはない。なんでも恐れずにやったほうがいい。

岡安副校長先生：講演に続いて、生徒たちの質問に丁寧に答えていただきありがとうございました。それでは6年生からお礼の言葉を述べさせていただきます。

生徒代表のお礼の言葉：今日は貴重な話をどうもありがとうございました。

お話はどれも私たちにとって大切なお話でした。私は特に、「人は一人では生きていけない仲間が大切」とのお話が心に残りました。今日のお話で、家族や友達との時間の重要性を改めて感じました。家族や友達との時間を増やして、残りわずかな学校生活を大切に過ごしたいと思います。今日はお忙しい中本当にありがとうございました。

(瀬尾さまの「みなさまに贈りたい言葉」)

1. 人を殺すな！傷つけるな！
 - 人とは、自分と他人
 - 傷つけるなどは、人の心と体を傷つけるな！
2. 危機管理の大原則

①自分のリスク（命）は自分で守る。

②一人では生きていけない。仲間が大切だ。

（家族の重要性・日常の活動とネットワークの大切さ）

3. 平時が重要だ。

（日頃からリスク管理する習慣を身に付けておかないといざというときに間に合わない）

注：全校生徒が、事前に上記の言葉について担任の先生と事前学習して瀬尾さまの授業に臨んでいる。

（参列した方々からの一言）：

1. 伊藤 衛（戸塚地区協議会まちづくり分科会防災世話人 新宿まちづくりの会事務局長）

瀬尾様の体験を通して語られたこの講演で、「疎開先でいじめに会いさぞ辛い思いをされたのかな。疎開先の子供達も見知らぬものへの興味が有っていじめという形で他人との関わりを表現したのかな。人は一人では生きていけぬもので、生きる事に対して常に向き合わなければならないのかな。いじめられたらいじめ返すそれがお互いに生きる事なのか。生きる事とは反応することで互いに刺激合っていき向上していくのだろう。」と様々なことを感じた。

阪神淡路での被災体験は自分の仕事がこの時点では何もできないが今出来ることは被災者の救済だと判断し、「自分も被災者で有り家族がいる。自助を先ず遣りなさい。」優先順位を明らかにして行動していくところがすごい所だと思った。思わず目を背けるような悲惨な映像を見せるより、幼少期の疎開先でのいじめの体験などが震災時を生き抜く力になった「いのちの物語」の方が、子供心にズシンと残るであろう。

しかも、ガンでの闘病中を押しての体験で有り今まさに死に直面しているご本人が子どもたちに命の大切さを訴えておられる。まさに「いのちの授業」であった。

自分の人生の残りの寿命がどれくらい残っているかは知れないが10年か20年か悔いのない生き方を瀬尾様から貰った。

2. 古澤 節子（元/民生・児童委員戸塚地区副会長、親栄クラブ会長）

瀬尾さんは幼少時に東京大空襲、神戸在勤の時に大震災に遭われ、晩年に胃ガンから肺、喉頭への転移と、何度も大変な経験をされ、余命いくばくと言われているにもかかわらず、長時間、立ちっぱなしで穏やかに話を続けられたのには本当に驚きました。

「病気とか、震災は大変だし、辛いことだけど、それに耐えてこられて、決して自分が不幸だとは思わないし、苦しみも悲しみも良い経験なのだと、大病をしてから考えられるようになりました」と子どもたちに語る姿は大変感動的でした。

お話の後で、たくさんの子が次々に質問し、活発に自分の意見を述べる様子を拝見

して、いのちの尊さを説かれた「いのちの授業」が子どもたちに伝わったことを実感しました。本当に、ありがとうございました。

3. 片野 真帆 (2年生/早大防災教育支援会 wasend)

先日、10月18日に戸塚第三小学校で行われた講演会に招待していただきありがとうございました。

そこで、子供の頃戦争で疎開したときのこと・阪神・淡路大震災での経験・ガンを宣告されたときの心情などについて貴重なお話を聞かせていただきました。

とくにお話の中で、瀬尾様が今までの経験をポジティブに捉えて生きている姿に感動しました。お話のテーマでもあった「いのち」の大切さや、生きていることの意味などについては、当日聞いていた子供達にも響くものがあったらと感じました。

最後の質疑応答では沢山の子供達が思い思いの質問を投げかけており、惜しくも時間が足りなかったほどでした。

瀬尾様の講話は、自分自身のこれからの生き方について見つめ直し、今自分ができるとは何かを考えるきっかけとなり感謝しております。ありがとうございました。

4. 堂野崎 梨沙 (江副学園・新宿日本語学校教務)

非常に勉強になりました。歩まれてきた人生の中での様々なご経験を聞かせていただきました。

そのご経験を伝えることで、児童の方々も感銘を受けたことだろうと思います。今後の益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

5. 片岡 俊彦 損保ジャパン日本興亜 団体・公務開発部長

瀬尾さんの熱く、ユーモアあふれる言葉をかみしめながら、私は東日本震災後に福島に赴き、被災者への地震保険のお支払に携わっていた時のことを思い出していました。保険金で被災者の生活再建のお手伝いをするのは可能ですが、失った命を取り戻すことはできません。「自分と家族の命は自分たちで守るんだ」という強いメッセージが心に響きました。地震や台風など大規模災害が当たり前になっている昨今、私ども保険会社社員にも、お客様や地域の皆さんに何かできることがあるのではないかと思います。

6. 泉瑞 則昭 (元日本損害保険協会・生活サービス部長)

今回、戦時体験・震災対応・闘病体験を語った瀬尾様の試みは、「命を大切にする、自分の命は自分で守ること」、「戦争や災害、大病は他人ごとではないこと」の意識づけに大変有意義で、「想い」が生徒に伝わっていたのではないのでしょうか。教訓を分りやすく次代へ伝えるという「課題」への突破口になる授業であったと「生徒たちの反応」を見て思いました。

瀬尾様は大震災をはるかに上回る被害があったB29の焼夷弾による木造密集市街

地火災から生残りしました。業界は、次なる市街地火災に備えています。

未来を担う子供たちへ「生きる力を養うため日々努力し平和であることへの感謝の念を持ち、一人ひとりが平和な日常と自分と身近な人のいのちを守るために今を精一杯生きることの大切さ」を、実体験を交えて伝えた大先輩の存在は貴重ではないでしょうか。

7. 島 英子 (新宿 NPO 協働推進センター／元東京海上日動 OG)

小学生全児童にむけて、「いのち」について語るというのは、とても難しい命題だなと感じながら瀬尾さんのお話に耳を傾けた。しかし瀬尾さんが話し始められるとそんな難しさは全くなく、明快な答えが、子どもや聞いている大人たちの耳に飛び込んできた。

当たり前大切にされている「いのち」が瀬尾さんの戦争、震災、癌罹患という誰もが経験するものではないものを重ねたことによって、不思議と明るく楽しく「いのち」を受け止めることが出来た。それはきっと子ども達の心にも届いたのではないだろうか？

小学生にとっては一番身近だったのが、「いじめ」という言葉だったと思うが、瀬尾さんの飛び抜けたお話を通して、自分自身で立ち向かうという気持ちが湧いたのではないかと感じた。

この世に生まれたことの喜びを感謝し、どんな時でも「いのち」を一番大切にすること、そして前を見ること！というシンプルでいて誰もが出来ないことを飄々と成し遂げている姿を目の当たりに拝見し、私自信も斯くありたいと、子ども達が素直な弾ける笑顔で瀬尾さんとやり取りする姿を見ながら、強く感じた。

(学校側から一言)

服部 みどり 新宿区立戸塚第三小学校校長

「生きる」ということについて、日々の生活の中でふと考えることがあります。特別なことだとは思いません。登校時に門のところであいさつをしている時、国籍、年齢、性別のどれをとっても、それぞれに違う方々が通ります。あいさつだけでなく短い言葉を交わすようになると、目標や願いが感じられます。それぞれに一生懸命に生きているということが伝わってきます。

だれかと切磋琢磨したり協力したりしながら進むことも、自分と人だれかを比べ挫折を味わうことも葛藤する中で新たな道を見付けることもできるのだと思います。自分だけで生きていくことはできない、自分と自分以外の人を大切にすることで、私たちは毎日を「生きる」のではないのでしょうか。

私は、今回の瀬尾さまのお話から、「私という人を知ってください。」という強いメッセージを受け取った気がします。与えられた「いのち」を精一杯生きるために、これからも自分と知り合っただれかの思いを感じ取りながら進んでいこう・・・そんなことを感じた1時間となりました。ありがとうございました。

(重川 希志依 常葉大学大学院環境防災研究科教授から一言)

人間には、自分の力で防げることと、自分の力では防ぎようのないことがあります。私が瀬尾さんと出会うきっかけとなったのは、人の力では防ぎようのない大地震、今日の授業でも紹介された阪神・淡路大震災(1995年1月17日)でした。この地震に直面した私たち研究グループは、震災を経験した人や組織がたどってきた災害対応の過程を詳細に記録し、確実にその記録を後世に残すプロジェクト(災害エスノグラフィ研究)に取り組んでいました。そのインタビューのお一人が、震災時に東京海上神戸支店長をされていた瀬尾さんです。

インタビューをした時、「私は昭和15年1月1日生まれ、終戦後のドサクサを生き抜いてきた。それが役に立った」と初めに話されました。今日の授業でも紹介されていましたが、地震発生から3日目に社員を集めた時には「自分が生きるを第一に!」ということをもっと強調しておっしゃったそうです。危機とか防災を突きつめて考えると、「死」「教育」「家族」「仲間」の四つに集約されるという瀬尾さんの言葉が印象に残っています。まさに今日の授業を通して瀬尾さんが伝えたかったことそのものではないでしょうか。

その後、ご自身が経験した阪神・淡路大震災の記録にとどまらず、2001年に起きたニューヨーク WTC ビルテロ災害など多くの災害で私たちと一緒に研究し、伝承活動を続けていらっしゃいます。それが戦災を乗り越え震災と闘ったご自分の使命とっていらっしゃるかのように。

注：重川先生は、瀬尾さまとともにオーラルヒストリーをまとめる。

(編集後記)

損保業界の大先輩である瀬尾さまの生きざまは、人生100年時代の古希を迎える私のお手本です。瀬尾さまのオーラルヒストリーを次代の世代に語り継いで、瀬尾さまのようなリーダーを育てる人づくりが一番大切なことではないでしょうか。微力ながら、瀬尾さまのオーラルヒストリーを大学のまち戸塚の未来を創ることもたちに語り継ぐシャドーワークがライフワークです。

多忙中ご機会を与えていただいた服部校長先生をはじめとした先生方、ご参列いただいた方々、原稿を寄せていただいた方々に大変感謝します。テープ起こしにご協力いただいた鈴木 のり子氏(オーラルヒストリーの制作で瀬尾様をサポート)にも感謝します。

(児島 正)